



花咲く空をネコはあるく



花咲く空をネコはあるく

花咲く空をネコはあるく

わ、まぶしい。起きたころには凍っていた地面がとけて、泥みたいになっている。日陰になっているところはまだ固いし、うっすら白いままだったりする。日なたはあったかいよ。山は白いし、まだマフラーもコートも必要なんだけど、鳥たちの声が聞こえるとなんだかわくわくしちゃうよね。ムクドリだっけ、それともヒヨドリだっけ。忘れたけど、何とかドリっていう名前だったのは間違いないと思うんだけど、結局あやふやだ。あ、鳴いてる鳴いてる。聞こえる、聞こえるよ。そばにいるのかな。すぐそばに。

鳴いてる、鳴いてる。パトロール？散歩？帰ってきたみたい...って、あー、そのまま入ってきたー。つかまえなきゃ。待ちなさいっ。がしっつつかまえると、にゃーとあーが混ざって濁ったような声を出す。おとなしくしててー。あの頃はささっと逃げちゃって大変だったよね。もう。足を洗っている間も、騒ぐ騒ぐ。足が濡れるだけでも、もう必死に逃げようとする。ごめんねー、もうちょっとー。もうちょっと...これで...よし、行きなさい。って離すと一目散に奥に行っちゃった。せっせと身だしなみ、身だしなみ。やれやれ。私も服がびしょ濡れだよ...ん、梅の花だ。ネコが歩いたあとに、梅の花。春だよね。

You may know art

みんなで持ち寄った、軽やかな音楽が流れる中でのドライブ。少し風は冷たいけれど、それでも日差しは春だね。行き先はちょっと離れた山、その中にある美術館だ。どんなところかまったくわからないんだけど、それは友達に任せてたからで、実は美術館かどうかもわからない。あれこれと想像しながら、最後はそれもやめて、そのままを楽しんでみることにする。

うわああ、なんかもう山奥だよな。ちょっと昔の田舎の家っていうか、私の実家の近くにもあった、けっこう昔から建ってそうな家。美術館っていうか隠れ家だよな。本物の隠れ家を見たことがあるわけじゃないけど…。たくさん木と生垣にぐるりと囲まれていて、一步踏み入ると、別の世界に紛れ込んでるような気もした。日本昔話みたいな。遠くに聞こえる鳥の声も、私の知ってるものとは違う感じがするなあ。そんなわけないんだけどそう思いたくなるんだから仕方ない。

これって昔の人が実際に使ってたうつわなんだよね？どこの国から来たんだろう。みんなが思い思いに建物の中を歩いて回っている。時々足音が小さく響いて、突然ふっと静かになる。誰かの大きな家におじゃまして、その人のコレクションを眺めてるんじゃないかなあなんて思ってみる。それでも違和感ないよね。高いところに窓があって、ふんわりした光が差し込んでる。しゃがんで、そのうつわと自分の目の高さを合わせてみる。じっと見てみる。また足音が聞こえる。

天気もいいし、せっかくなので庭に出てみよう。サービスで出してもらったコーヒーを片手に、庭にある木の椅子に座ってぼんやりしていると、みんなもわらわらやってきた。さっき見たうつわや謎の絵の話をしてる。ん、おじいさんがいるよ。軒先に座って、ぼんやりと庭を眺めてる。けっこう細身のジーンズをはいてるし、着てるコートもおじいさんっぽくない。くたびれてるんだけど、すごく似合ってる。穏やかな表情で、ずっと同じ姿勢でいる。仙人？ポップな仙人？この建物の雰囲気ぴったり合ってる、むしろ私たちの方が違う感じかも。やっぱり仙人の住む世界におじゃましちゃったとか…。どきどきしながら挨拶を試みたら、にっこり笑って、小さく会釈を返してくれた。なんだかほっとして、やわらかい気分になれた。

月のペダル

なんか、とって月が近づいてるんだって。月が近づくとって言われてもね、あんまりよくわかんないんだけど。それでも、なんとなくいつもと違う感じがする...気がする。じっと見ているとどんどん近づいてくるのかな。どんどん大きくなっていく。昔見た夢を思い出す。まだ覚えているんだ。もう夢だったのか起きているときに考えたことなのかぐちゃぐちゃになっているけど。山の上に浮かぶ、大きな大きな月。ぽつんと私だけがそこにいて、月から目が離せなくなっている。怖くて本当は逃げ出したかったのかもしれないし、自然の風景のように受け入れていたのかもしれない。忘れちゃったな。今でも覚えているのは、大きな月を眺めていたってこと。

右の方...あれは東だ。東の山から月が顔を出している。少し目を離して、また東の空を見ると、もう月は山から離れている。月が私を追いかけてくる。ペダルをこぐ足に力を入れて、交差点を通り過ぎる。家がいくつも並んでいる道を、いつものように駆け抜ける。車が一台くらい通ってもおかしくないけれど、まったくすれ違わない。家の並びが途切れて、田んぼが広がる。左側には家が並んでいるのに、右側にはひとつもない。月が現れる。さっきより大きくなっていく気がする。気のせいかもしれない。色が赤みがかっているからそう見えるだけなのだろう、きっと。たぶん...。早くこの道を抜きたい。早く家に着きたい。なるべく右を見ないように、前を向いて。早く。早く。

いつもは電車の窓から見ているだけの景色。その中を自転車で走るのは、なんだか不思議な気分がするね。ときどき音がして向こうを見ると、いつも乗っている電車がするすると通り過ぎていく。入り口に立っている人が自分なんじゃないかって思ったりもする。私はあのドアの向こうから自転車に乗っている私を眺めている、とかね。こっちの私と、あっちの私。そんなことを思い浮かべながら、ぎゅっとペダルをこぐ。どうでもいいイメージはどこかに行ってしまう。代わりに優しい風を感じる。冬が長引いたぶん、春の風は気持ちいいよね。少し冷たいんだけど、自転車に乗っていればあまり気にならない。むしろちょうどいいかな。このまま海がある方に行きたいなあ、私の足だと一日かかってもたどり着かない気もするけど...

空色スケッチブック

窓際の席を見つけて座ってみたら、目の前には色鉛筆があって驚いた。なんで？なんで色鉛筆？ぐっと興味がわいた。コーヒーとケーキを注文してから、マグカップみたいなペン立てから青いのを手取る。なんだか懐かしいな。もう何年触ってないんだろう？ずっと昔に使ってた色鉛筆セットはどこにいったのかな？まだあるはずなんだけどな。まあいいや。手帳を取り出して、メモのページを開いてさっそく色を塗ってみる。わ、楽しい。次は、何色にしようかな。えーと、確か、藍色？群青色？さっき塗った青色の上に、濃い青をそっと足してみる。いいね、いいね。空かな、海かな。やっぱり、空だよな。あ、でも、湖ってのはあるかもしれない。川もだよな。んん、でもやっぱり、空かな。空の色。

緑色の季節。青い空の下に緑を丁寧に塗る。そういえば、緑色の葉っぱと青い雨ってのもあるよね。みずいろって色で雨を描いたな。こうして見てみると、雨を降らせてる梅雨の空、って気がしてきた。絵にするとどんより曇り空もさわやかな青い空に変わるんだよね。葉っぱの下には、雨宿りするネコを描いちゃおう。雨の日もパトロールは欠かさないもんね。茶色と、こげ茶と、あと黒、と。なんだか、雨上がりを待ってるうちに寝ちゃいそうな感じ。今にもあくびしそう。あくびしたネコって、すっごい顔になるけどな。

夕焼けの空は、ピンク、だいたい、赤紫。南向きの窓から、信じられないくらいきれいな夕焼けが見えると、ぐっと身体を乗り出して西の方を見てたんだ。すぐに色は変わって真っ暗になるから、少しでも長く見ていたかった。西の空が濃い青色に塗りつぶされ始めたら、大きく息をついて部屋の中に戻って、窓を閉める。ノートと色鉛筆を取り出して、ほんのちょっと前まで見ていた空を描いてみる。見たこともないような雲の形、あっという間に変わる空の色、太陽が山の向こうに隠れそうになる瞬間。見たままに、描きたいままに、色鉛筆で塗る。ページをめくって、描いて、めくって、描いて。おなかですいたのも忘れてね。

A Part OF LIFE

きれい！線路のそばに花が咲いてる。なんて花かわかんないのが残念だけど、きれいな色。思わずカメラを取り出して、パチリと一枚、二枚。ピンクの花びらに水滴がぽつぽつと乗っかってる。お昼くらいまで降ってた雨の忘れもの？それとも道草？気まぐれに顔を出す太陽に照らされて、キラキラしてる。雨上がりの楽しみだよね。キラリと光る水の粒に寄って、もう一枚。そしたら少し離れたところに咲いてる赤い花に蝶がひらひらっとやってきた。花から花へ、忙しそうに飛び移る。もう一度、パチリ。おまけにもう一枚パチリ、と。後ろには線路が見えて、赤い花にとまる蝶。すてきな光景。電車がやってきて、蝶はどこかに飛んでった。どこに行ったんだろう。また会えるかな。

私の隣に男の子が立ってて、花と線路を背にして、ぴしっと背筋を伸ばしている。それをお母さんがカメラに収めている。私はそおっと横に動く。そこで思わず、撮りましょうか？って声をかけた。自分でもちょっと驚いたけど、そんなことを言った。お母さんは一瞬戸惑ったみたいだけど、すぐになっこり笑って、ありがとうございますと言った。こちらこそ。私はカメラを受け取って、男の子とお母さんが並ぶ。はいチーズなんて言うのが恥ずかしくて、いきますよーなんていいんだかどうか分からないかけ声で一枚、二枚。お母さんが、もう一度ありがとうございますと言ってくれた。男の子が小さく頭を下げた。カメラを返して、私も頭を下げた。なんだかよくわかんないんだけど、いつもならこんなことしないんだけど。

控えめに光が差し込んできて、少しずつ濃くなる。いつまでも見ていたいけど、いつまでも見られない。すぐに暗くなることもあれば、けっこう見られることもある。同じ時間だけ、同じ光景、ってことはないんだよね。今日はこうやって、すてきな夕暮れを見ることができました、っと。心の中でつぶやいてみる。そんなの見られないときもあった。でも今日は見ていられる。そのことも、よくよく考えると、嬉しいことなんだよね。忘れちゃうけど。忘れたら思い出そう。私が忘れても、誰かが覚えていて、私は思い出す。忘れないなんて言い切る自信はないけれど、思い出す自信はあるよ。すてきな空模様を見たらいいなあって思うし、昔にも同じ気持ちになったことを思い出すし。すてきな思い出も、あんまりすてきじゃない思い出も、ちゃんと私の中にある。だから、思い出すよ。

夢跡

あれ、私だけなのかな。気づいたら、お店には私ひとりだけがいる。確か、あんまり埋まっていない手帳をぼおっと眺めてどうしようかなって考えてて、ときどき窓の下を歩く人たちを眺めて、そのうちそのまま外を見てたら、いつの間にかひとりになっていた。そういえば何人かおばあちゃんたちが集まって、なにやらわいわい話していたっけな。絶対、女子高生より元気。何に夢中になっていたのか、とってもにぎやかだったんだけど、いつ帰ったんだろう。

どこから聞こえてくるのかわからないけど、小さく聞こえる音楽はピアノかな。その音だけが聞こえるから、余計に静かに感じる。なんだか私だけ置いてかれたみたい。家に帰っても誰もいなくて、二階に行っても、家の裏に回っても誰もいなくて、どうしようもなく自分の部屋でじっとしていた...ってことがあった。そのときはどんな風を感じたっけな。怖かったのかな、それとも寂しかったのかな。静かだった、ってのは覚えているんだけど。だんだん暗くなって部屋の中で、どうしようもなく静かだったな。どうしようもなく。

Lush Hour

音が聞こえる。じっと耳を澄ます。音が聴こえる。朝がやってきた。眠気を払おうとして頭を振ってみる。ぼんやり残る夢の記憶も、朝の空気に混じって、溶けて、見えなくなる。たぶん、手を伸ばしてもつかめない。ボタンを押す。スピーカーから流れる音楽が私のスイッチを切り替える。流れる窓の外の景色は、いつも見ている景色だ。いつも乗っている電車。いつの間にか、いつもあるものになっていたけれど、ある瞬間にそうじゃなくなるかもしれない。でも今はわからなくて、その時にならないと、きっと理解できないと思う。それでも、いつもを生み出してくれる人たちの存在を、少し考えてみる。

楽しいときはもっと楽しくしてくれるし、そうでないときは、気持ちを少し上向きにしてくれる。上向かないこともあるよ。でもね、じっと耐えて、別の何かでちょっと上を向くことができたなら、そのときは私の背中をぐっと押してくれるんだ。南の空にある太陽の光はいつだって力強い。首をぐっと後ろに反らせて上を向くと、まぶしい。全身で光を感じたい。ずっとずっと昔、もう想像もつかないくらいに遠い遠い過去の誰かとつながっている気がする。そしてずっと先にいる誰かともつながっている。

影が少しずつ長くなってきて、横顔がオレンジに染まってる。なんだか夢を見ているかのよう。楽しい夢ばかりじゃないけど、たまにはずっと楽しい夢もあるよね。控えめに月が顔を覗かせると、太陽がそっと姿を消す。じわりじわりと月の光が濃くなってくる。みんなに降り注ぐ光。でも、誰かにとってはひとりに当たるスポットライトになるんだ。淡く青く光る輪郭が、いっそう夢の色を濃くする。いろんなことを覚えているし、いろんなことを忘れている。忘れられないこともあれば、いつの間にか忘れていたこともある。忘れるべきじゃないのに、忘れていくこともある。忘れたいのに、忘れていくこともある。思い出しても、かつてほど痛まないことも、ある。

もうみんな、夢の中に潜り込んだかな。ずっとずっと高いところ、少しでも空に近いところで会おうよ。少しずつ光が眠り始めて、夜空がいっそう濃くなって、黒の奥に黒があるような、どこまでも真っ暗な空が広がる。シルエットも見えない。夜を越えて、空を超える。そこまで行けば、涙はこぼれても、下には落ちない。落ちていくから悲しく思うのかもしれない。漂って、どこかへ行ってしまえば、きっとそれほど悲しくない。でも、乾いた大地が涙を吸ってくれるから、忘れることができるのかもしれないね。夢が終わるまで、終わりの音が聞こえるまで、もう少し漂ってみる。

いきなり急な坂道だ。前に住んでいたところも、駅から帰る途中に急な坂道があって、毎日大変だったな。あんまり深く考えずに決めちゃったから誰にも文句は言えないんだけど。日差しはちょっと夏みたいな感じだけど、日陰に入れば風が気持ちいいよ。からっとしてるから、その辺は気をつけて、と。日陰メインで坂道を登る。あんまり人がいなくて、ただただ歩くにはちょうどいいな。坂の途中に四角い木が立ってて、坂の名前とその由来が書いてある。こういうのをひとつひとつ巡る人たちがいるんだよね。私も嫌いじゃないかも、でもまあ写真に撮ったりメモしたりするほどじゃなくて、ちょっと立ち止まって読んでへええって思うくらい。100年200年前にも同じ場所を歩いた人がいる。やっぱり日焼けとか乾燥とか気にしながら登ってたのかな、わけないか。あの頃は下駄かな。からんころん。

鉄塔？好きの友達がいるんだけど、電線が集まって、どんと建ってる、えーとエッフェル塔みたいな、あれね。どっかに電車で一緒に行ったとき、家が見えなくなってたんぼっかの風景になると、その子がわくわくした表情になるんだよね。ずっと窓の外を見てるからなんだろうと思ってたら、鉄塔が見えた瞬間に騒ぎ出して、魅力を語り始めて…。ごめん、ぜんぜん覚えてないよ。東京タワーのライトアップなんかはきれいだなあって思うけど、昼間の感じだと、んん、あれを見てもねー。下から見上げたら、大きくて圧倒されるけどさ。

道路の向こう側に地下鉄の入り口が見えた。ってことは反対側のこっちにも入り口があるはずなんだけど、見つからない。もしかして、そういうものじゃないのかな。近くにある歩道橋。その先をたどって、たどって…あのへんに行けるみたい。これで行ってことね。行くよ。エレベーターと階段があるけど、私は階段を上る。そんなに急いでないし、こっちの方がわりと好きだしね。少し上って踊り場みたいのところに出ると、折り返して上るのかと思ったらそうじゃなくて、少し右にずれてまた階段が延びている。普通は反対側に行くよね、マンションの階段と同じでさ。こんなの初めて見たかもしれないな。また上る。カンカン響く音が気持ちいいね。今度こそ折り返し地点。ぐるりと身体を返すと建物の隙間から青空がぱあっと目に飛び込んできた。一気に駆け上がって、エレベーターの入り口を通り過ぎて、道路の上に、青空の下に飛び出す。車がさっと通り過ぎて、離れたところでは工事をやってる。大きなビルがあちこちに見える、その上に太陽が浮かんでる。日差しに背中を押されてる。階段を、またカンカン鳴らしながら降りる。慌てず、急がず。地下鉄の入り口から出てきた人たちとすれ違う。登山客どうしがすれ違うときみたいな、そんな感じ。おかえりなさいといってらっしゃい。こういうのって、いいよね。

I can breathe here

秋の風をふわっと感じた。気持ちがふわりと軽くなって、わくわくしてくる。コーヒーの香りは秋の風に乗って届く、ん、逆かな。でもそうじゃないか。じゃあこうしよう。コーヒーのいい香りと秋の涼しい風が一緒になってやってくる。手をつないで、仲良くね。私はそれを迎え入れる。来てくれてありがとう。久しぶりに会う友達みたいだね。会った瞬間に手を取り合って喜ぶあの感じ。ひとくち飲んだコーヒーは秋の味、かな？一度行ってみたいと思ってるコーヒー屋さんの豆を使ったコーヒー。初めて口にする味は、私の好きな味。

ごはんおいしいなあ。いつも食べてるけど、こうやって気持ちのいい風が入ってくる窓際の席で食べると、いっそうおいしい。向こうには海が見えるしね。パン派かごはん派かって聞かれたら、そうだなあ、できるならどっちも食べたい派。どっちがいいとか悪いとかじゃないんだけど、そのときに応じて適当に答えるかも。ほとんど意味はないんだけど、暇なときとか、電車の中とか、ときどきそんな話になる。そういえば、同じ感じでネコ派イヌ派ってのもあるけどネコ派。

街が重ね着してる、あっちも、こっちも。見てて楽しいよお。みんな違うんだけど、すごいよね。やっぱり夏は重ねられないから派手な色になっちゃうのかな。重ね着だとそういうのって少なくなる。ちょっと見せるくらい。同じ感じの色がこう、グラデーションみたいにちょっとずつずれて重なっている。びたっとする感じにしなければ、風に舞ってそのグラデーションが揺れるんだ。ひらり。やさしい色が、ひらり揺れる。なんだか風に乗った気分がするよね、気持ちは上向きだ。

また降ってきた。でも弱い。傘は差さなくてもいいかな。もう少し降ってきたら差そう。お店の光が道に映って、ゆらゆら光ってる。少し肌寒いけど、そんなに気にはならない。髪を切ってもらって、気分はいいからね。自分は変わらないけど、気持ちは変わる。ちょっとね。小雨の夜も、きらきら反射する道も、秋っぽい空気もまるごと楽しめる。好きな街で、ゆっくり息ができるから。吸って、吐いて。やさしく吸って、やさしく吐いて。帰ったらあったかいコーヒーを飲もう。ゆっくりね。おやつは何にしよう。

Portside walkin' girl

ああもう眠い眠い。眠いけど、頭ははっきりしてて、なんだかちぐはぐ。街灯の光はぼんやりしているのに、やけにまぶしくて、夜になったあたりの感じ。本当に時間が経ったのかあやしい気もする。大きなあくび。頭の中がぐにゃんとしたり、いきなりぱっとしたり、交互にやってくる。こんな時間にも車は走ってるんだ。一台、一台、しばらくしてまた一台。しんとしたと思ったら、また来る。いつもと違う時間に歩く街は、私の知らない世界。誰も通らない街灯は、なんだか寂しそう。あったかくもないし、冷たくもない。味のないクラッカーみたいな光が、ぽつんとひとつ。

どんどん青が、ぎゅうっと濃くなっていくよ。ホームから見える西の空はオレンジ、きれいなシルエット。もっともって見てたいな。もうちょっとだけ電車が遅れてもいいかも、なんて勝手なことを思ってみる。青い色が黒くなって、にじむようにオレンジも青く、黒く染まって。もうすぐ夜が降りてくる。さらさらした空気が気持ちいい。すてきな空のグラデーションを目に焼き付けて、心に染み込ませる。明日も見られるかな、見られないかな。誰にもわかんないよね。会えるかも、会えないかも。わかんないけど、今の姿をもうちょっと見てよう。電車が来るまで、もうちょっとね。

はっと自分の影に気づいて、空を見上げる。これまで聴いてた音楽をストップしてみる。しんとした夜、ちょっとずつ聞こえてくる。電車の音かな、それとも車かバイクかな。テレビの音っぽいのも、誰かの話し声も聞こえる。空からは何も聞こえない。色と同じように、音も塗りつぶせるのかな。音を音で塗りつぶしたら、それは混ざり合った音だよ。黒い音なんてないよね。黒を塗ったら、どんな色も黒になる。でもそれは純粋な黒じゃないんだよね。その色は黒の中で生き続けるんだ。私の目には見えなくても、その色は、ある。あるよね。

初めてだっけ、そうじゃなかった気もするけど、見たとしてもすっごく小さい頃かもしれない。海のずっと向こう、水平線って、ぼんやりしてるんだね。山ってそんなことないでしょ？くっきり、こう、空と山が分かれてて、そこに太陽が沈んでくと、山のシルエットがきれいに浮き上がるんだよ。わかる？けどさ、海と空って、分かれてるのはわかるけど、あのあたりってぼんやりしてるよね。太陽もぼやけて、いっしょに溶けて、どろどろになって、海に混ざっていきそうな、ね。ほら、ほら。溶けてる。溶けて、溶けて、もうすぐなくなる。もうすぐ、...ん。

ノラネコアソシエーション

ネコがとてとて横断歩道を渡ってる。ひんやりした朝の光を浴びて、毛並みがきらきらしてる。朝のパトロールかな。都会のネコも大変だよ。車に気をつけてね。って言われるまでもないか。むしろ私の方が気をつけろって言われるかも。この前なんか電柱にぶつかりそうになって慌ててよけたもんね。だって、変な顔した写真送ってくるんだもの。いつもはそんなことしないのに、なんでまた突然。笑いをこらえるのに必死になっていたら電柱が迫ってきて、うわああってなって。危ない危ない。ネコはそんなことないよね、ないよね。

わあ。いきなり耳元でネコの鳴き声が出て全力で驚いた。肩に乗っかってるみたいにすぐ近くから聞こえたんだけど、どこだろう。右を向くと、誰かの家の窓が少し開いていて、そこにこっちを見てるネコがいた。ちょうど顔の高さだ。この子ね。網戸越しにちょこんと座ってるのが見える。ネコってみんな、こうやって窓辺で外を見ているのが好きなのかな。それとも見張りなのかな。じっと外を眺めてる背中を眺めながら、何を考えるのかなあなんて思ってみたり。今日は見られる立場だ。私はきっと縄張りに侵入した悪いやつですよー。

ふっと顔を上げたら、シルエットになった屋根の上がぼこんと盛り上がっていて、なんだろうなんだろうってよく見ると、ネコが箱座りしている。西に沈んでいく太陽を眺めている、ように見えるけど、実際はおやすみ中かもね。それとも本当に夕陽を見送るのが日課なのかな。じっとして動かない。まるで、お城のてっぺんにあるような、しゃちほこみみたいだね。あれも何かのお守りなんだよね、確か。きっとこの建物も、このネコに守られているんだ。ネコ型シルエットがもぞもぞと動いて、ぎゅーっと伸びをして、あ、今度はまるくなった。本気で寝るのか。

階段の途中で黒くてふわふわしたネコがまるくなっていた。暗くて気づかなかったら、それこそ本当に踏んだかもしれないよ。ネコは私に気づくと、片目だけを開けてこっちを見た。真っ黒なかたまりの中に、きらっと光る目が見える。宝石みたいだね。面倒そうにまた目を閉じようとする。ちょうど日なたで気持ちいいのはわかるけどー、どいてー。一段飛ばして降りるのは危険だし、かと言ってね、ネコをよけていくのも足を置く場所がなくて困る。ブーツだから余計に感覚がわかんない。本当に踏んづけちゃうぞ。うーん、どうしよう。どいてよー。

月夜の香りは秋の調べ

これがキンモクセイの匂いなんだね！ちょっと甘くて、さわやかで、ふわっとしてて。この時期になるとみんなキンモクセイがどうのって言ってたけど、私は意識したことがなくて、けれども別に嫌いだったわけでもない。今でもどういう木かなんて想像もつかないんだけど、匂いはわかったよ。これね。どこからやってくるんだろう。こうしてずっと歩いてても、匂いは途切れない。あっちこっちにあるってこと？そんなにたくさん？今までわかんなかった私ってなんなの。なんなの。

なんだかね、澄んだ空気の中を、すてきな匂いにつられて歩いているみたい。きれいな三日月が浮かんでる。雲もなくて、くっきり光ってる。もしかして、この匂いは月から降ってきてるのかもね。そんな想像も楽しい。明日の朝はもっと寒くなるかな。ちょっと早いかもと思ったけど、このニット着てきてよかったよ。じんわりあったかいし、これで帰り道も大丈夫。今夜は毛布にくるまって寝よう。ネコのおなかみたいにあったかいんだ。明日の朝もきっとあったかいよね。



花咲く空をネコはあるく